

# 文字認識の変容

鵜飼 大介

## 1. 文字という思想

ミシェル・フーコーが『言葉と物』のなかで、西欧における「知の歴史」をたどる際に、三つの時代区分を設けたことはよく知られている。ルネサンスの「類似の知」にはじまり、古典主義における、同一性と相違性からなる表（タブロー）の形成を指向する「表象の知」を経由して、近代における「人間主義の知」が登場する。世紀をおおまかに対応させると、「類似の知」は16世紀（およびそれ以前）、「表象の知」は17世紀から18世紀末、「人間主義の知」は18世紀末以降ということになる。この議論の大枠に従えば、各時期のあいだには不連続性が認められ、断絶が強調されることになる。

しかし、その議論の細部に目を向けると不連続だけではなく、ある種の連続性も見えてくる。連続性とは正確な言い方ではないが、前の時期の知が変容をこうむりながらも、新たな知の布置において受け継がれていると解釈しうる場合があるのだ。たとえばルネサンス期に顕著な「類似の知」は、その後の古典主義時代において完全に消え去ったわけではない。フーコーは次のように書いている。

17世紀初頭以来知の領域から追放された類似は、依然として言語の外縁を構成している。すなわちそれは、分析し、秩序づけ、認識することのできるものの領域を取りかこむ、環状の地域をなすのである。それは、言説によって一掃されるとはいえ、それなしには言説が語ることのできぬ、そうしたつぶやきにほかならない。(Foucault 1966=1974: 146)。

この見方に即せば、「類似の知」は古典主義時代において、完全に取るに足らない無価値なものになったわけではない。それは「それなしには言説が語ることのできぬ」つぶやきであり、古典主義時代の言説形成においても重要で、もっといえば不可欠な役割を果たしていたということになる。

この類似の知を象徴するもののひとつが「ヒエログリフ (hieroglyph)」である。ふたたびフーコーを引くと、ルネサンス期の知にとって世界の相貌は、いわばヒエログリフで書かれた「開かれた大きな書物」のようなものであり、可視的な外徴から不可視のものを解読していくことが知の課題である (Foucault 1966=1974: 51-52)。そしてルネサンス期にはそうした知的課題に応じるべく、ヒエログリフに関する学問が存在していた (Wittkower 1977=1991: 213-243,

Pope 1975=1995: 18-81)。現実のエジプトのヒエログリフを参照しない場合でも、あるいはそうした場合にこそ想像によって、ヒエログリフの独特の形象と「意味」を読み解いていく企てがなされた。ヒエログリフのような文字に対する見方（文字観）は、ルネサンス期の知にとって重要な部分をなしていたように思われる。拙稿のねらいは、こうした文字観の形成と展開を、そのいわば背景となる知の様態の変容に即しながらたどることにある。

文字の解読史を扱う本はほとんどの場合、文字の「正確な解読」という目的に向かって、文字にかんする種々の偏見が斥けられ、誤解が正されて学問が徐々に進歩していく過程として解読史を描きだす。文字の解読史においては、たとえばマイケル・D・コウによる『マヤ文字解読』では、17世紀においてアタナジウス・キルヒャーが表明したヒエログリフについての見方は、古代エジプト文字の正確な解読を一世紀以上にわたって妨げた偏見にすぎない（Coe 1999=2003: 113, 177）。ルネサンス期のヒエログリフに関する学問などは、またその後の古典主義時代の文字観なども、ほとんど無価値なものとして顧みられない。

文字学が、文字についての正確な理解にむけて発展してきたことは確かだろう。だが、本論は文字観を思想的に扱う立場をとるので、文字についての現在の知見からすれば斥けられるべき旧来の「誤解や偏見」の類も、それぞれ時代のいわば関数として、固有の歴史的・思想的意義をもつものとして捉えていく。もちろん限られた紙幅のなかではごく一部の検討にとどまらざるをえないが、こうした立場からの検討を通じて、西欧・中欧における文字観や文字意識の形成過程の一端を捉えることができるはずである。

## 2. 異世界の文字の「発見」から、タブローへの馴化へ

フーコーは『言葉と物』でルネサンス期についての記述において、「書かれたものの優位」を取りあげている。なかでも当座の論脈で重要なのは、「物の文字」（*l'écriture des choses*）である。彼が述べるように、ルネサンス期では「見られるもの」と「読まれるもの」、「観察されたもの」と「人づてに伝えられたもの」とが区別されず、「言葉」と「物」とは、いわば唯一の滑らかな連続面に存在するように思考されていたのであり、「知る」ことは、そうした面を復元しようとする終わりなき巡歴であった。フーコーは16世紀の人、ウィリアム・ターナーを引き合いに出しながら、次のように記している。

だから世界の相貌は、紋章、文字、暗号、晦冥な語——ターナーによれば「ヒエログリフ」——によって覆われるのである。かくして直接的類似の空間は、開かれた大きな書物<sup>1)</sup>のようなものとなる。そこには無数の文字記号（*graphismes*）がひしめきあい、ページ全体をつうじて、奇妙な形象が交叉し、ときには反復されるのが見られるのだ。あとはそれらを解読するだけでよい。（Foucault 1966=1974: 52）

フーコーはこうしたことを論じるにあたって旅行記には触れていないが、ヨーロッパから遠く離れた地への旅というのも、ある意味では世界という「開かれた大きな書物」のなかを巡り、解読していくような営みであった。「大航海時代」にヨーロッパの外の世界（中国や新大陸）に赴いた宣教師や旅行者が、自身の使いなれたアルファベットとは異なる文字に接したときに、そのありように興味をおぼえ、記録に残したり、報告に記したりすることがあった。異世界にみずから赴かなくても、伝聞・報告・記録をもとに、他の人物に伝えたり、あらためて報告や叙述が著されたりすることもあった。種々の情報源や体験、度重なる伝聞、加えられる価値判断などに応じてさまざまな見解が存在したとはいえ、どのような事象が記述の焦点を結んでいたのかという点については、いくらか共通性を取り出すことができる。なかでも「中国の文字<sup>2)</sup>」について、16世紀の旅行者たちがどのようにその特徴を捉えたかについて一瞥しておこう。

中国人は一定数の文字だけをもって筆記することはない。なぜなら彼らの書くいっさいは象形によるからである。(Cruz 1569-1570 = 2002: 203)

彼らはわれわれのような体系の文字を用いるのではなく、そのかわりに物をかたどった文字だけを用いるということである。(Mendoça 1585 = 1965: 193)

各地方地方の言葉はお互いには通じないが、書いたものなら分かるので、それは要するに、文字すなわち図形は、あらゆる言葉に対して同じものであり、同一事物を表示するからである。ただし、既に述べたように、それは事物を表すものであって、言葉を表さないから、読み方と発音は同じでない。(Acosta [1590] 1962 = 1966: 268)

ヨーロッパから遠く離れた中国において、「物をかたどった文字」——ある種の「物の文字」——が使われているというのだ<sup>3)</sup>。宣教師や旅行者が中国で見た象形的な文字は、フーコーがターナーに即しながら述べたのは、言ってみればヨーロッパ内の「物の文字」だが、旅行記で記されているのは、異世界の地に見出された「物の文字」である。ヒエログリフとは別に、中国でもまた独特の形象性をそなえた文字記号が使われているということが報告され、中国の文字にたいする上述のような見方は次第にステレオタイプを形成していった。

こうした記述や報告は、旅行記のなかに挿入されたエピソードであり、文字のありかたに焦点を絞って、それについて多く紙幅を割いて詳述するというものではない。アコスタは『新大陸自然文化史 (*Historia natural y moral de las Indias*)』のなかで中国の文字以外にも日本の文字、メキシコの文字、ペルーのキープなどにも目を向けている。とはいえ体系的な文字分類がなされているわけではなく、同書にふくまれる自然や文化についての雑多な報告の一部分をなしているにすぎない。

「大航海時代」を通じて、ヨーロッパの外で用いられている文字についての情報は記述され、

収集・蓄積されていった。17世紀——フーコーの言う「古典主義時代」——に入ると、それまでの異世界の文字についての断片的な情報が相互に関連づけられ、タブローへと、つまり一覧表的な知へと徐々にまとめあげられていく。

ジョン・ウィルキンズは17世紀における普遍言語・書法の考案者として名を残しているが、彼は独自の普遍言語・書法について説明する前に、既存の種々の文字を列挙し、それらの特徴について記している。彼がとりあげる文字は、ヘブライ文字、アラビア文字、ギリシア文字、ラテン文字、中国の文字、エジプトのヒエログリフなどのほか、アッシリア、シリア、フェニキア、エチオピア、アルメニア等々における文字など多岐にわたっている。世界各地の諸文字についての情報が雑然と列挙されている観があるとはいえ、じつに多様な文字が視野に収められている。フーコーが指摘するように、タブロー（差異と同一性からなる秩序の表であり、一望監視的な知でもある）の形成は、古典主義時代の重要な知的課題であり、世界各地の文字についての報告もしだいにタブローのなかに位置づけられていく。しかもここでは、旅行記のように文字の性質について挿話的に触れられているのではなく、文字に焦点を絞って論述が展開されている。

このことをウィルキンズが普遍言語の考案者であることと考え合わせてみよう。17世紀は普遍言語案が考案されはじめた時期であった。普遍言語は結局のところ実現されなかったものであるとはいえ、言語における普遍性が17世紀の知において想定されたことは重要である。「可能性としての普遍性」を想定することと、分類表を作るような一覧表的な知の視座は、ひとまず別の事象といえるが両者は無関係ではない。というのも、従来のラテン語の通用範囲をこえるような普遍言語の普遍性を想定することと、ヨーロッパの内外にある種々の文字を分類しうるような表の一般性（≒普遍性）とは、いずれも大航海時代における「地理上の発見」と視野の拡張により、旧来のヨーロッパ世界の相対化を通じて獲得された普遍性・一般性であるからだ。

ハドソンは西欧における文字認識の歴史をたどっており、その論は本稿と重なる部分も少なくないが、彼は17世紀にヘブライ文字やヒエログリフといった文字の脱神秘化（*demystification of writing*）が生じたと述べている（Hudson 1994: 32-54）。文字の脱神秘化という現象も、出版印刷を介した活字・書物の広まりによる面も大きいが、大航海時代に端を発する旧来のヨーロッパ世界の相対化の所産という面もあると考えられる。

### 3. タブローの完成と終焉

18世紀初頭にニコラ・フレレは、「書く技術の一般原理、とくに中国の文字の基礎にかんする考察」（1718年）という論文をものしている。タイトル自体が示しているように、これは中国の文字の特殊性にも注目しながら、それをも包摂する「一般原理」を解明しようとする論文である。18世紀中葉にはウォーバートンが、いっそう体系的な「文字の一般史」（*general history of writing*）を構想した。フレレによる「書く技術の一般原理」にせよ、ウォーバートンによる「文字の一般史」にせよ、諸文字の特殊性を視野に入れつつ、それらを一般性のあるタブローの

中に位置づけていこうという知への意志がうかがえる。

フレレやウォーバートの所論は、文字起源論としての性格を有している。言語起源論が数多記されるようになった18世紀は、言語起源論ほど知られていないとはいえ、文字起源論が書かれるようになった世紀でもある。起源が措定されれば、それと対をなすように終局も措定される。ウォーバートンは絵に始まり、メキシコの絵文字、ヒエログリフ、中国の文字を経由して、アルファベットに至るまでの経緯を、すなわち始原的な絵から、アルファベットという終局的な文字までの展開過程<sup>4)</sup>を思弁的にたどっている。展開過程の叙述に収まるように、とりあげられる文字の種類も限られている。

ルソーが『人間不平等起原論』のなかで「この主題について追求できる研究は歴史的な真理ではなく、ただ仮説的で条件的な推理 (*des raisonnements hypothétiques et conditionnels*)」(Rousseau 1755=1972: 38)であるとしたように、18世紀における社会や言語などの起源の探究は、推測や思弁を積み重ねて仮説を構成する方法をとっていた。文字起源論についても同様で、絵や絵文字からアルファベットへの展開過程も、推測や思弁にもとづいて構成された仮説的なものである。こうした叙述では、前世紀のウィルキンズによる雑然と諸文字が登記されていたタブロー(一覧表)と比べて、体系化が進み整理されている。タブローを貫いているのが、起源から終局に向かって発展していくような時間継起であり、これが18世紀的な文字起源論の特徴である。

前節でウィルキンズに即して見たように、17世紀の西欧では幾多の文字が分類表に登記されていったが、18世紀には体系的な整序へと向かう。一連の過程は、大航海時代以降にもたらされた世界各地の特殊な文字についての知見を、タブローへと登記し、そのなかで位置づけ、一般性をめざす知への意志のもとで特殊性を飼い慣らしていく過程であったともいえよう。

タブロー形成の企ての極点に位置するのが、18世紀末にフランス革命の激動のなかで書かれたコンドルセの『人間精神進歩史 (*Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain*)』であろう。人間の理性の進歩を10段階に分けた同書において、文字についての叙述は多くはない。ヒエログリフもアルファベットも第3期に属し、彼がとりわけ重視した印刷術は第7期と第8期、最後の第10期では普遍言語の試みが登場する。タブローのひとつの完成された姿をここに認めることができる。

極端な例だが、クール・ド・ジェブランは「すべてのアルファベットはヒエログリフである」と述べるにいたる。彼はアルファベットの一字一字には本来それぞれ「意味」があるものとして、その起源を遡り、アルファベットの各字について原初的なヒエログリフの形と意味を見定めようとしているのだ。ジェブラン自身はそれらを *alphabet hiéroglyphique* と名づけているが、ヒエログリフはエジプトという特定の場所から離れて、すべての文字に見出されうるような機能的な概念として扱われるようになっていく。こうした事態を、ジュネットは「普遍化されたヒエログリフ」と特徴づけている (Genette 1976=1991: 173-214)。なお、ウォーバートの構想した「文字の一般史」における文字 (*writing*) は、地理的に限定された各地の文字に対応する、いわ



は実体概念ではなく、機能概念の様相を帯びはじめていた。このような機能概念化も、タブローを可能にするほどの抽象性と一般性（を指向する知）のもとで生じたことである<sup>5)</sup>。

19世紀には文字にかんする機能概念化が独特の仕方で行進していくが、18世紀にある種の「完成」をみたタブローは失効し、いわば破れていく。フーコーならば「表象の限界」と言うだろうが、19世紀の知は古典主義的なタブローから解き放たれる。シャンポリオンが先鞭をつけたエジプトの古代文字の「正確な解読」は、タブローの破れをひとつの契機としている。

ドゥ・ギーニュは18世紀中葉に、中国はかつてエジプトの植民地であったという説を唱え、中国の文字はエジプトのヒエログリフに由来すると推定した（高津・関根1964: 35-36）。このような説は今日からみればいかにも荒唐無稽だが、起源からの展開過程を推定しようとする18世紀的なタブローでは珍しくない。ヒエログリフをはじめとするエジプトの諸文字の「正確な解読」は、こうしたタブロー（に代表される古典主義的な知の支配）からの解放とともに進捗していった<sup>6)</sup>。

重要なことを付け加えておけば、古代文字の解読作業は知的次元における変化にとどまるものではなく、政治的次元の変化とも連動している。エジプト古代文字の解読の鍵として有名なロゼッタストーンは、1799年にナポレオンの遠征隊が発見したものである。ナポレオンは遠征にあたって多くの学者を兵籍に編入し、エジプト協会を創設してそのメンバーにさまざまな主題についての研究を行わせた（Said 1978=1993: 191）。サイドが巧みに表現したように、このエジプト協会は「軍の研究師団」であり、それをともなった遠征隊はいわば「動く文書館」であることがもくろまれていた（Said 1978=1993: 191, 197）。エジプト古代文字の本格的な——近代実証主義的な——解読は、知的次元と政治的次元とが緊密に絡み合う状況のもとで着手されたのである。

そして、エジプト古代文字の解読作業の進行は、文字にかんする概念系の変化をともなうものだった（DeFrancis 1984: 135）。シャンポリオンはヒエログリフの解読に際して、くりかえし現れる固有名詞の音価などに注目して解読の手がかりを得た。シャンポリオンがヒエログリフにも、そしてヒエラティックやデモティックにも、音価（表音的価値）を認めたことは、解読作業を大きく進めた。彼自身、表音的なヒエログリフの発見は、「全てのヒエログリフ体系への真の鍵」（Champollion 1824: 11）と述べている。示唆的なのはシャンポリオンのこの発見的認識とほぼ同時期に、アベル・レミュザによって中国の文字における表音的価値の重要性が指摘されていることである（Pope 1975=1995: 126, 147）。エジプトの諸文字であれ、中国の文字であれ、表音性と無縁でないどころか、それが必要不可欠な役割を果たしていることが認識されたのである。

18世紀の「文字の一般史」のようなタブローでは、絵文字やヒエログリフ、アルファベットといった諸概念は、地理的に限定された各地の文字からは独立して操作しうる概念という様相を呈しはじめていた。19世紀にはその傾向が独特の仕方で行進し、文字はより機能的にも理解されるようになる。シャンポリオンは、「アルファベット文字」（écriture alphabétique）と「表意的

文字」(écriture idéographique) とを対置している。前者は「音」を表示するのであり、後者は「観念」を表示する機能を担う文字である。

ド・フランシスは Oxford English Dictionary などを参照しながら、英語の ideographic やフランス語の idéographique という語の初出は、シャンポリオンがエジプト文字の解読に成功した年(1822年)であると推定している(DeFrancis 1984: 135)。ideographic や idéographique は、いわば「文字自体」に性質が帰属しているという物象化された視点からではなく、文字がどのように読まれ、その音や意味がどう理解されるかという実践のありかたに着目して提起された概念である。19世紀における文字の機能や使われ方を問う姿勢と概念系は、以後の文字学の展開において、世界各地の文字を分類し分析していく姿勢と概念系のもとになっていく。

そして、表意(性)とアルファベット(性)とは等価ではなく、それらはさまざまに変奏されながら、優劣の価値判断を招き寄せるものだった。19世紀半ばにショーペンハウアーは、ヨーロッパの人々が中国の表語文字(Wortschrift der Chinesen)の価値を低く見ていることに異を唱えている。

しかし、すべての文字の任務は、相手の理性に眼で見える視覚的記号をつうじて概念を喚起することである。してみれば、まず眼に対して耳で聞くべき聴覚的記号を提示し、さしずめこれを概念そのものの担い手とすることは、明らかに非常な回り道だ。こうしてわれわれの字母文字(Buchstabenschrift)は記号の記号にすぎないことになっているのである。したがって、聴覚的記号のほうが視覚的記号に対してどういう長所があるかが問題になる。字母文字は、眼から理性へ直通する端的な道をとらないで、聴覚的記号の媒介によってはじめて相手の精神へ視覚的記号を語らせるようなひどい回り道をとることをわれわれに可能にしているわけだが、明らかに中国人のやり方のほうが簡単だ。すなわち視覚的記号を直接端的に概念の担い手とし、単なる発音の記号にしないのが中国人のやり方だからだ。(Schopenhauer [1851] 1966=1996: 188、傍点は原文ではイタリック)

この文章は、中国の文字はアルファベットを含む字母文字よりも劣っているとする当時の一般的な見方に抗して表明されている。たとえばヘーゲルは、字母文字をヒエログリフ文字よりも優れたものとしていた<sup>7)</sup>。ショーペンハウアーの上記の主張は、中国の文字にたいする批判的な見方に対して、反・批判を行ったものとも解釈できる。

さらに文字の優劣を論じるにあたって、視覚的記号と聴覚的記号という区別が持ちこまれていることは注目に値する。目と耳という身体部位を参照しながら、視覚的記号と聴覚的記号という記号の区別が設けられ、それが文字の区別とも対応している。ここで文字の区別は、文字(記号)を使う身体の様態に立脚した区別でもあるわけだ。ショーペンハウアーは聴覚的記号や耳のための言語を、視覚的記号や目のための言語よりも優位におく見方に反対しているが、次の引用は、聴覚的記号や耳のための言語に優位をおく見方について、彼自身が説明したものである。少

し長いがそのまま引いておきたい。

(1) われわれは天性からいって聴覚的記号にまず手をのばす。それも最初はわれわれの感動をあらわすためだが、やがて思想も表現しようということになる。つまりまっさきにわれわれが行きつくのは耳のための言語であって、眼のための言語をあみだすことは、そのあとから考えることになる。しかし耳で聞くための言語とはまったく別種の眼で見るための新しい言語を発明したり、またその時々学びとるよりは、いま必要になってきた眼のための言語をまえにあった耳のための言語に還元するほうが、はるかにてっとりばやい。とりわけ無数の単語をアルファベットといったきわめてわずかな音声に還元することができ、この音声によって容易に表現可能なことがすぐ発見されたからなおさらである。

(2) 眼はなるほど耳にくらべ複雑多様な変化を把握することはできるけれど、しかしそういう変化をつくりだすとすると、耳の場合はかろうじてなんとかなるけれども、眼に対しては道具を使わずにはおそらく不可能である。そのうえ、聴覚的記号は舌を流暢にあやつることで早口でもいえるが、視覚的記号はそのように迅速にもちだすことも交替させることも絶対にできない。これは聾啞者の指話法が完全でない点にも示されているとおりである。こうした事情こそ本来、聴覚が言語の本質的感官になるゆえんであり、またそれによって理性の本質的感官ともなる理由である。(Schopenhauer [1851] 1966=1996: 188、傍点は原文ではイタリック)

(1) と (2) の区別はさほど明瞭ではないが、(1) では言語や記号に、(2) では眼や耳といった感覚器官や、舌や指といった身体部位に叙述の重点が置かれている。眼や耳をそなえ、誰でもないが誰でもある、普遍化かつ個別化された身体像（身体モデル）が析出され、それに即して言語や記号について判断がなされている。(2) の末尾において「聴覚が言語の本質的感官になるゆえんであり、またそれによって理性の本質的感官ともなる理由である」という見方に至るまでに、いろいろな論点を混在させながら、「耳のための言語」や「聴覚的記号」の優位——一種の音声中心主義的といえる見方——が縁どられている。言語や記号を用いる身体としての「主体」に照準する傾向を、『言葉と物』が古典主義時代の後、近代における「人間の出現」と呼んでいる事態と関連させれば、18世紀末以降の近代の知が、「言語を語る主体（人間）」を前景化させたことにともなって、文字記号を使う主体（「読む主体」や「書く主体」）の前景化も生じたと考えられる。

#### 4. 〈他なる文字〉という知の特異点

以上述べてきたことをまとめておこう。大航海時代には異世界（中国や新大陸）についての文字の報告が記され、蓄積された。それらをもとに、17世紀には世界各地の文字についてのタブ



ローが形成されはじめ、18世紀には起源から完成態へと向かう文字の発展過程について思弁が重ねられ、タブローの整序が試みられた。タブローが「完成」するや否や、19世紀にはタブローが破れ、失効するとともに、実証的な文字解読が着手され近代的な文字観が形成されていく。そのとき文字を用いる身体（主体）のありかたに照らしながら文字記号を分類する知が生じてきた。このように見た場合、18世紀（タブローの精緻化）と19世紀（タブローの失効）のあいだに、フーコーが古典主義時代と近代とのあいだに見出したような知の断絶を認めることもできよう。

他方で、19世紀が18世紀の知の指向性を受け継いで、さらに徹底化させた面があることも否めない。19世紀に進行する文字の機能概念化は、18世紀にその萌芽がみられる。文字発展の終局にアルファベットを位置づける、いわばアルファベット中心主義的な価値判断と進化主義的な図式は、18世紀の文字起源論に伏在しているが、19世紀に引き継がれ、顕在化していく。この点に即してみると、フーコーが引いた古典主義時代と近代とを区別する分割線は、それほど明瞭に引けるわけではなさそうである。

以上のような展開を概観したとき、アルファベットとは異なる文字の存在や性質を認識することが、文字観および文字論の歴史的形成に寄与したこともまた認められよう。とりわけ中国の文字は、古典主義時代においてタブローにひとまず収められつつも、他方でうまく位置づけがたく、タブローに馴化しきれない特殊な文字でもあった。中国の文字に代表されるようなアルファベットにとっての〈他なる文字〉が、文字にかんする知の再形成と変容を促していた。

文字観の西欧的伝統は、20世紀以降の思想にもなお尾を引いているように思われる。詳述する用意はまだないが、20世紀の初頭にフロイトは、「夢の作業」を論じるにあたり、夢の顕在内容をヒエログリフに喩えることから始めている（Freud 1900=1968: 231-232）。ベンヤミンは20世紀前半に「類似（の知）」に注目したが、彼はヒエログリフという文字記号にも関心を寄せていた。また20世紀の後半にクリステヴァは、意味生産の様態やテキストの生成的性質について説く際、ところどころでヒエログリフや中国の文字に言及している（Kristeva 1969=1983）。アルファベットとは〈他なる文字〉としての象形的な文字記号は、気まぐれに関心を向けられているというわけではなく、少なくともそれにとどまらず、目立たないながらも西欧的な知の参照点であり、その形成と変容にかかわる存在でもあるように思われる。

#### 註

- 1) 世界を書物として捉える見方は、ユダヤ・キリスト教的な伝統に根ざしたのもでもあり、ルネサンス期のみに見られるわけではない。その見方の歴史的変遷については、メタファー学の立場からブルーメンベルクが詳述している（Blumenberg 1981=2005）。
- 2) 西欧からみた「中国」を歴史的に論じる場合、とりわけ政治的単位ではなく言語の分類にかかわる概念を扱う際には、田中（1993）に倣って「中国」と言わず「シナ」と表記したほうが妥当だろう。高島（1998: 126-168）が丁寧に論じているように、「支那（シナ）」にはもともと蔑むニュアンスはないのだが、戦後の日本語では特有の差別的含意が付きまとう。率直に言えば、「中国」とも「シナ」

とも書きづらいのだが、本稿では暫定的に「中国」としておく。

- 3) ド・フランシスは、表音的なアルファベットとの対照のもとで、音を介さず直接に意味を表示する「シンボル」や「文字（キャラクター）」として、中国の文字を理解するヨーロッパの知的伝統を「表意性の神話」としてまとめている（DeFrancis 1984: 133-148）。
- 4) ウォーバートンは象形文字について「提喩的象形文字（curiologic hieroglyphic）」「譬喩的象形文字（tropical hieroglyphic）」「象徴的象形文字（symbolic hieroglyphic）」という三種の下位区分を設けている。細かな下位区分からは、文字の発展過程をいわばできるだけすまなく辿ろうとする指向がうかがえる。18世紀において発展過程を叙述しようとするタブローは、究極的には連続体を指向しているようにみえる。
- 5) 18世紀の「文字の一般史」において、例えば「中国の文字」は、絵や絵文字やアルファベットなどとの関係で位置づけられる。タブローにおいてそれぞれの項は他の項との関係によって、さながら関数的に位置づけられ、このことが文字概念の機能概念化を進めていったように思われる。functionには、関数という意味と機能という意味があることを想起してもよい。
- 6) 楔形文字の解読に大きな貢献をした最初の人物は、カールステン・ニープールであるとされる（杉[1968] 2006: 34-36）。彼は18世紀の後半に、楔形文字の碑文をおおむね正確に数多く書写し、それらは後の楔形文字解読の資料となった。しかし、読めない文字列を正確に多数書き写していくことは、大変集中力を要するし、甚だ困難である。実際、彼以前にトーマス・ハーバートやエンゲルバート・ケンベルといった人物は、17世紀に楔形文字を書写したが、非常に誤写が多い。ニープールにとって楔形文字の文字列は執念をもって正確に書き写すに値するほど価値のあるものだったが、彼以前のハーバートやケンベルにとってはそれほどでもなかったということは重要と思われる。両者のあいだで、歴史というものの価値や、近代実証主義的な態度の出現に関わることで大きな変化が萌しているように考えられるからだ。なお、ニープールはエジプトの記念碑も正確に写しとり、18世紀後半に公刊し、ヒエログリフ解読の素地をつくった人物でもある（高津・関根 1964: 34-35）。
- 7) ヘーゲルにおいて文字の価値評価の対照は、少なくとも表面的には鮮明である。彼は「ヒエログリフ文字」（Hieroglyphenschrift）を、「具体的精神的な諸々の表象の関係は当然もつれ合わされ、混乱させられざるをえない」（Hegel 1830=1987: 365）と価値を低く見ている。他方で「字母文字」（Buchstabenschrift）は、「それ自身でより知性的なもの」（Hegel 1830=1987: 364）であり、「字母文字の読み書きを習うこと」は、「どれほど高く評価してもしすぎないような、無限の教養手段として尊敬されている」（Hegel 1830=1987: 366）と高く評価している。論の細部を見ると、全面的には言い切れないのだが、おおむね「ヒエログリフ」よりも「字母文字」の方が賞賛されている。18世紀以上にあらさまになっている表音文字（アルファベット、字母文字）に高い価値をおく態度を、ここに見てとることもできよう。

\* 訳文は文脈などに応じて改めた箇所がある。

#### 参考文献

- Acosta, José (Joseph) de, [1590] 1962, *Historia natural y moral de las Indias*, Fondo de Cultura Económica. (= 1966, 増田義郎訳『新大陸自然文化史（下）——大航海時代叢書第I期4』岩波書店。）
- Blumenberg, Hans, 1981, *Die Lesbarkeit der Welt*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, (= 2005, 山本尤・伊藤秀一訳『世界の読解可能性』法政大学出版局。)
- Champollion, Jean François, 1824, *Précis du système hiéroglyphique des anciens Égyptiens*, Paris: Chez Treuttel

et Würtz.

- Coe, Michael D. 1999, *Breaking the Maya Code*, revised edition, London: Thames and Hudson Ltd. (=2003, 増田義郎監修, 武井摩利・徳江佐和子訳『マヤ文字解説』創元社.)
- Condorcet, Jean-Antoine-Nicolas de Caritat, Marquis de, 1793-1794, *Tableau historique des progrès de l'esprit humain* (=1951, 渡辺誠訳『人間精神進歩史 — 第一部』岩波書店.) (=1951, 渡辺誠訳『人間精神進歩史 — 第二部』岩波書店.)
- Cruz, Gaspar da, 1569-1570, *Tractado das cousas da China* (=2002, 日埜博司訳『中国誌：ポルトガル宣教師が見た大明帝国』講談社学術文庫.)
- DeFrancis, John, 1984, *The Chinese Language: Fact and Fantasy*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses: une archéologie des sciences humaines* Paris: Gallimard. (=1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物 — 人文科学の考古学』新潮社.)
- Freud, Sigmund, 1900, *Die Traumdeutung* (=1968, 高橋義孝訳『フロイト著作集2 — 夢判断』人文書院)
- Fréret, Nicolas, [1718] 1996, "Sur les principes généraux de l'art d'écrire," *Mémoires académiques*, Paris: Fayard.
- Genette, Gérard, 1976, *Mimologiques: voyage en Cratylie*, Paris: Éditions du Seuil. (=1991, 花輪光監訳, 大越敏男・大庭克夫・神郡悦子・小原弘道・瀬川純夫・前川泰子・松沢和宏・吉田好克訳『ミモロジック』書肆風の薔薇.)
- Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1830, *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse*, herausgegeben von Friedhelm Nicolin und Otto Pöggeler, Hamburg: F. Meiner. (=1987, 櫻山欽四郎・川原栄峰・塩屋竹男訳『エンチユクロベディー』河出書房新社.)
- Hudson, Nicholas, 1994, *Writing and European Thought 1600-1830*, New York: Cambridge University Press.
- Kittler, Friedrich A, 1985, *Aufschreibesysteme 1800-1900*, München: W. Fink. (=1990, Michael Metteer(tr.), *Discourse Networks 1800/1900*, Stanford, California: Stanford University Press.)
- Kristeva, Julia, 1969, *Σημειωτική: recherches pour une sémanalyse*, Paris: Édition du Seuil. (=1983, 原田邦夫訳『記号の解体学 — セメイオチケ1』せりか書房.) (=1984, 中沢新一・原田邦夫・松浦寿夫・松枝到訳『記号の生成論 — セメイオチケ2』せりか書房.)
- Mendoça, Ioan Gonzalez de, 1585, *Historia de las cosas mas notables, ritos y costumbres del Gran Reyno de la China, sabidas assi por los libros de los mesmos Chinas, como por relaciones de religiosos y otras personas que an estado en el dicho Reyno*, Roma. (=1965, 長南実・矢沢利彦訳『シナ大王国誌 — 大航海時代叢書第1期6』岩波書店.)
- Pope, Maurice W. M., 1975, *The Story of Decipherment from Egyptian Hieroglyphic to Linear B*, London: Thames & Hudson. (=1995, 唐須教光訳『古代文字の世界』講談社.)
- Rousseau, Jean-Jacques, [1755] 1962, *Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les homes, The political writings of Jean Jacques Rousseau*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1972, 本田喜代治・平岡昇訳『人間不平等起原論』岩波書店.)
- Said, Edward W., 1978, *Orientalism*, New York: Georges Borchardt Inc. (=1993, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳『オリエンタリズム 上・下』平凡社)
- Schopenhauer, Arthur, [1851] 1966, *Parerga und Paralipomena: kleinere philosophische Schriften*, Bd.2, Wiesbaden: Brockhaus. (=1996, 秋山英夫訳『ショーペンハウアー全集14 — 哲学小品集V』白水社.)
- 杉勇, [1968] 2006, 『楔形文字入門』講談社.

高島俊男, 1998, 『本が好き、悪口言うのはもっと好き』文藝春秋.

高津春繁・関根正雄, 1964, 『古代文字の解説』岩波書店.

田中克彦, 1993, 『国家語をこえて』筑摩書房.

Warburton, William, [1765] 1978, *The Divine Legation of Moses Demonstrated* 3, New York: Garland.

Wilkins, John, [1668] 2002, *An Essay towards a Real Character, and a Philosophical Language*, Bristol: Thoemmes Press.

Wittkower, Rudolf, 1977, *Allegory and the Migration of Symbols*, London: Thames and Hudson Ltd./Boulder, Colorado: Westview Press Inc. (=1991, 大野芳材・西野嘉章訳『アレゴリーとシンボル——図像の東西交渉史』平凡社.